

古代イスラエルにおける富の問題

——死海文書の知恵文書を中心に考える——

勝村弘也

一、はじめに

本研究の主眼は、死海文書の中の「知恵文書A」(Sapiential Work A)と呼ばれてきた知恵文書において、富と貧困がどのような仕方であらわれているかについて考察することにある。しかしながら、このようなテーマについて論じる際には、旧約に含まれている知恵文書や外典のシラ書において、この問題がどのように論じられているのかを視野に入れておく必要がある。そこで、古代イスラエルにおける伝統的な知恵の立場からは、富と貧困がどのようなものとして捉えられていたのか、それが社会・経済的な状況が大きく変化していった時代のなかで、どう変容していくことになったのかについて考察しながら、「知恵文書A」が同じ問題をどのような地平において、どのように論じようとしているのかを見てゆきたい。

ここで考察の中心となる「知恵文書A」については、死海文書の研究者以外には、ほとんどなじみがないと思われるので、まず簡単にこの文書に関する基本的な情報を提供しておく。¹通常、この文書に含まれると考えられているの

は、クムラン第四洞穴から発見された4Q415-418などの多数の写本断片、および第一洞穴から発見された1Q26である。研究の初期においては、この文書にどれだけの断片が含まれているのかが、判然とせず、書名に関しても必ずしも一定していなかった。⁽²⁾ 現在では、D・J・ハリングトンなどの綿密な研究によって、この文書の範囲が確定され、各断片の配列位置を含む相互関係がほぼ明らかになった。それによるとこの文書に含まれるのは、1Q26, 4Q415-418, 418a, 418c, 423である。文書の呼称としては、近年は Discoveries of the Judean Desert (以下DJDと略記) のシリーズなどにおいて4Q Instruction が用いられている。⁽³⁾ そこで本論考においても、文書名には「知恵文書A」とともに「教訓」も用いることにする。この文書に含まれる諸断片は、八名の書き手によって筆写されたことが確認され、しかも発見された断片数はきわめて多い(たとえば、三百三の断片が4Q418「教訓四」と関連付けられている)。⁽⁴⁾ このような事実から判断すると、この長い巻物になっていた知恵文書がクムラン教団にとってきわめて重要な文書であったことは間違いない。

成立年代に関しては、各写本の書体からはヘロデ時代などが推定されるが、内容から判断すると前二世紀(マカベア朝以前)を想定する研究者が多い。⁽⁵⁾

文書の冒頭部と推定されている箇所など(「教訓二」断片一、「教訓三」断片一第一欄)では、黙示的終末論が顕著であって、しばしば「起こるべきことの秘義 (Mystery)」について語られ、占星術用語も出てくる。⁽⁶⁾ このことからこの文書全体は、秘義的黙示的な傾向の強い知恵文学であって、実践的な勧告はあまり重要ではないとする研究者が存在する。⁽⁷⁾ しかし現在では文書全体については、実生活におけるひとの生き方に関する勧告が顕著であるとする見方が有力になった。この意味では「知恵文書A」ないし「教訓」は、古代オリエント世界に共通の伝統的な知恵文学の系列

に属すると判断される。この文書で問題となっている「貧困」が実際に経済的な意味での貧しさであるのかどうかについては、文書全体の性格付けと関連して激しく論争されてきた。富と貧困はこの文書の中心的なテーマではないとする見解も存在するが、この文書の読み手の経済状況は、実際に貧しいのであって、そのことが「教訓」全体の理解にとって重要な意味をもっていると考えるのが妥当であろう。^①

二、箴言の古い伝承層における富と貧困

最初に考察の対象とするのは、古代イスラエルの伝統的な知恵の立場を表明している箴言の中の古い伝承層である。箴言一〇章一節―二二章一六節と二五―二九章には「ソロモンの詞」を表題にもつ二つの格言集がある。いずれの格言集の方がより古いのかに関しては議論の余地があるが、両者が王国時代に編集されたことは確実である。^②そこに収められている格言の内容から判断すると、貨幣経済が社会に浸透するよりも前の伝統的な農村社会を生活の座 (Sitz im Leben) としている。このことはたとえば、勤勉な労働をテーマとしている格言における労働の内容がほとんど農作業に限られていることによっても確認できる。^③「ソロモンの第一詞集」と「ソロモンの第二詞集」に収集されている格言においては、富は、まず土地、農産物そして家畜として考えられている。しかしもちろん、金銀が取引のたびに計量されるという形で一種の貨幣として存在していたことも確かであろう。

富は、原則的には神から与えられる祝福として肯定的に受け入れられた。^④これは神の創造されたこの世界が、美しく良いものであるとする世界観に照応している。「ヤハウエの祝福、それがひとを豊かにする。ひとの苦勞は、それに

何も付け加えない」(箴一〇・二二)がそのことを語っている。貧乏が、それ自身で肯定的に評価されることはない。貧乏人がさまざまな不利益をこうむっている事は明白であることを以下の格言が示している。「豊かな者の富は、その堅固な町。貧しい者の滅びは、その貧困」(一〇・一五)。「貧乏人は、その隣人にさえも憎まれる。だが、富んでいる人を愛する者は多い」(一四・二〇、一九・四をも参照)。

ただし富は正当な手段で獲得されたものでなければならなかった。この意味で、勤勉を勧め、怠慢を戒める格言は箴言の中に多くみられる(二〇・四、二〇・一三等)。

また、度量衡のごまかしや価格操作、詐欺などの不正な手段で獲得された富が呪われるとともに——このことは、預言書でも繰り返し返し問題になっている——急激に増大したような富が疑いの目をもつて見られた。以下の格言がそのことを示している。「偽りの秤は、ヤハウェの嫌悪するもの。だが、正しいおもりの石は、彼のお気にいり」(一一・一、一一・二六をも参照)。「だまし取ったパンはうまいが、後でその口は砂利で満たされる」(二〇・一七、二二・六をも参照)。「急いで得た財産は、減少する。だが、手の上に集める者は、増し加える」(一三・一一、二〇・二二、二八・二〇をも参照)。

経済的な破綻の原因としては、怠慢や過度の快楽の追求(二二・一七参照)のほかに「高慢」が考えられた。「破滅の前には、傲慢。また、つまずきの前には、高ぶる気持ち」(二六・一八、一五・二五前半をも参照)とある通りである。このような格言には預言者の思想の影響が認められる。

以上のような考察から単純に「応報 (Vergeltung, retribution)」を読み取ることには、慎重でなければならない。箴言が理想としているのは、富める義人である。義人とは、隣人に対して慈悲深い人のことであるが、そこで問題に

なるのは「応報」ではなくて、むしろ「互酬性」ないし「互惠性」(reciprocity)である。なお、このような問題についてはすでに繰り返し論じたのでここではこれ以上は述べない。¹⁵⁾ 互惠性の論理を理解しない愚者は、ナバルと呼ばれる。彼は「けち」である。その典型的な例がサムエル記上二五章に登場する富める愚者のナバルである(箴言三〇・二二をも参照)。¹⁶⁾

箴言の中で重要な意義をもつのは、富の価値を相対化する一群の格言である。「・・は、・・よりもよい」という〈比較の詞〉の形態をもつものをA群として、¹⁷⁾ それ以外の形態をもつものをB群として以下に示す。

A群 ヤハウエへの畏れのうちにある僅かなものの方が、多くの財宝とその中に騒動があるよりもよい(一五・一六)。
野菜一品でそこに愛がある方が、肥えた牛の料理とそこに憎しみがあるよりもよい(一五・一七。一七・一をも参照)。

へり下った心で貧しい人々といっしよの方が、高ぶった人々と分捕りものを分けるよりもよい(二六・一九)。
まっとうに歩む貧乏人の方が、道が曲っていて、彼が富んでいるよりもよい(二八・六)。

B群 富者と貧者は互いに出会う。両者を造られたのは、ヤハウエである(二二・二)。

弱者を抑圧する者は、その造り主をのしる。だが、貧しい人をあわれむ者は、彼を重んじる(一四・三一)。
貧乏人を嘲笑する者は、その造り主をのしる。不幸を喜ぶ者は、罰を免れられない(一七・五)。
富んでいる人は、自分の眼には賢い。だが、分別のある弱者が、彼を吟味する(二八・一一)。

箴言は繰り返し返し他人の「保証人になるな」と警告している。「知らない人の保証をすると、災難がふりかかる。だが、手を打つことを嫌う者は安全である」(一一・一五、他に一七・一八、六・一―六参照)、とある通りである。このことは、シラ書や知恵文書Aとの比較で問題になる(後述)。

三、ペルシヤ時代以降の知恵文学における富と貧困

ペルシヤ時代以降においては、貨幣経済の著しい発展によって、富の所有形態が変化した。また富者による貧者への搾取もより過酷なものになった。このような時代に富と貧困がどのように考えられていたのかについて簡単に見過す。

(一) 箴言の中の比較的新しい伝承層における富の問題

ペルシヤ時代になると、ユダヤでも貨幣経済の浸透によって商業資本の支配を受けた農民の生活が危機的な状況に陥った。ネヘミヤの改革は、ユダヤ社会の階層分化を押し止めて、社会秩序を維持するための試みであつたと考えられる。箴言一一九章に取められた一群の教訓詩はこのような時代を背景としている。西方世界で鑄造貨幣が流通をはじめたのは、リュディアにギュゲス王(前六八九―六五二年在位)がいた時のことだとされる。貨幣はやがてペルシヤ帝国に広まり、アレクサンドロス大王の時代になると、地中海世界からインドにおよぶ広大な地域に同じ貨幣が流通するようになった。貨幣の登場は、犯罪の形態を変えた。都市的な生活を背景にした盗賊の出現である。都市に富裕

な商人が住み、街道をお金が移動するようになれば、これを暴力的に奪うのはさほど困難ではなくなる。箴言の最初の論は、「わが子よ、ならず者があなたを誘惑しても、くみしてはならない」(一・一〇)から始まっている。ここで言う「ならず者」は、一一節以下の待ち伏せへの誘いのことばから見て盗賊を指していると考えられる。箴言一九章で勧告の対象となっている若者はしばしば「未熟な者(ペテイ)」と呼ばれる。彼は十分な知恵の訓練を受けていない者であり、そのために誘惑に弱く詐欺にかかると考えられた。このような若者は、ハサル・レーブ「思慮に欠ける者」としても特徴付けられている。勧告の受け手が、「未熟な者」——単純に言えば愚者——として扱われていることは、知恵文書Aの読者が「英知ある者(メービーン)」と呼ばれていることと対照的である。

箴言三章一三節以下の知恵の賛歌では、女性として人格化された知恵がどのような財宝よりも価値があるとして賛美される(箴言八章も参照)。なおこのテクストは、シラ書、ソロモンの知恵だけではなく、「幸いなる者(Beatitudes, 40525)」と名付けられている死海文書中の知恵文書にも大きな影響を与えている。⁽²¹⁾

箴言の末尾に配置された「有能な妻の歌」は、ペルシャ時代の作品であつて、日用品が市場で売買される経済社会を前提にしている。この歌では古代地中海世界でもっとも有利な商品とされる葡萄酒の製造販売が問題になっている。⁽²²⁾ ここでも富に対する伝統的な評価は変わっていない。

(二) コヘレトにおける富と知恵

正典のコヘレト書は、知恵文書Aとほぼ同時代に成立したと推定されるから、両者の比較は重要である。コヘレトの著者に果たして思想的な一貫性があるのかどうかは疑問であるが、この文書で富の価値の著しい相対化が起こって

いることは間違いない。富や権力を手にした者が、短期間に没落してしまう現実があるからである（四・一四以下、五・二二以下、六・一以下など）。それだけではなく、知恵もまた厳しい批判にさらされる。伝統社会が解体し、知識人が権力から遠ざけられる状況のなかで、ソフィストのような伝統的な価値観に批判的な教師が語っているのである。⁽²³⁾

貧しくても賢い少年の方が、忠告を受けつけない老いた愚王にまさる（四・一三）。

銀を愛する者は銀に満足しない。誰でも財を愛する者は収益に「満足し」ない。これもまた空である（五・九）。

知恵が多ければ、憂いが多く、知識を重ねては、悩みを重ねる（一・一八）。

そこで私は思った、知恵は武力にまさるが、貧者の知恵は侮蔑され、その言葉は聞かれない、と（九・一六）。⁽²⁴⁾

従来この文書は、ダニエル書のような黙示文学が登場する以前に成立したとされてきたが、最近の研究では「反黙示的」傾向が指摘されている。つまり同時代に台頭してきた黙示思想に対して反論していると考えるのである。コヘレトに特有の円環的な時間の概念もそのような傾向との関連で検討されている。⁽²⁵⁾このような意味でも、クムランの知恵文書とコヘレト書の比較は重要であるが、ここでは十分に検討することができない。

(三) シラ書（ベン・シラの知恵）における富

この文書も知恵文書Aとほぼ同時代に成立したと考えられるから、比較が重要である。著者はイスラエルの知恵の

伝統にしっかりと根をおろしているが、ヘレニズムの影響を強く受けていることも確かである。富に対しては、しばしば箴言と共通する思想を表現している。社会のエリート層に対して貧者を経済的に援助せよと勧告し(四・一など)、貪欲を戒める(一四・三以下)。しかし、「狼と小羊とがどうして共存出来ようか」と、金持ちと貧乏人が和解不可能な闘争に巻き込まれている現実を直視してもいる(一三・一五以下)。前の時代の箴言や同時代の知恵文書Aとの比較で重要なのはシラ書二九章である。そこでは金銭の貸し借りや保証人となることについて語られている。箴言と異なるのは、隣人の保証人になるのはきわめて危険であるが、それでもなお隣人を助けてやれと勧告している点である(二九・一四以下)⁽²⁸⁾。

四、「知恵文書A」(「教訓」)における富と貧困

まず、この文書で勧告の対象となっている人々について考える。合計九つの断片からなる4Q423は、他の写本群との比較によって「教訓」の後半部分に含まれることが明らかにされた。⁽²⁹⁾ 以下に断片五から引用する。

資料(一) 4Q423断片五⁽²⁸⁾

「……」コラハの裁き^(a)を。そしてお前の耳を「起こるべき秘義に」彼が開いた時に、^(b)「……」そしてお前の「……」
「お前の」家父長^(c)「……」とお前の民の指導者^(a)。「……彼は」すべての支配者たちの嗣業を分割した。^(e)そして彼の手に
よってすべての「被造」物を彼は形造った。そして彼は「彼らの業の」報酬を知っており、彼らすべてを真実をもつ

て裁「くであるう」^(f)。そして父祖たちと子孫とに報いるであろう、すべての生粋の者たちとともに「寄留者」^(g)たちにも。そしてことは「……もしもお前が」農夫「ならば」、夏の定めの時を吟味しなさい。そしてお前の收穫物を集めなさい、しかるべき時に、また「季節の」変わり目に「……」。お前のすべての收穫物をよくわきまえなさい。そしてお前の労働をよく理「解」しなさい。悪とともに善を「知ることによつて」。「……」愚行の主とともに賢明な人「……」

註 (a) 民数一六章で語られるコラハに対する神の裁きは、終末における裁きの典型とされる。(b) IQ26断片一の四行目、「教訓二」断片二第三欄一八行目、「教訓四」断片一二三第三欄四行目などの並行箇所から「起ころべき秘義に」が補われる。(c) 原語は *nyksak*。但し最初の二文字は推読。民数三六・一に類似表現がある。(d) 原語の *nasysak* は、旧約では王国成立前の時代の部族社会の指導者をさす。民数一六・二では、コラハの謀反に加担した二百五十名をナスイと表現している。また、この語は、クムラン文書では終末時の指導者をさす。「戦いの書」(QM)「第三欄一五—一六行目、第五欄一行目など。(e) クムラン文書では「嗣業を分割する」は、人の運命が神によって予定されていることを意味する表現である。(f) 世の支配者たちに対する終末の裁きについては、外典の「知恵の書」六・一以下を参照。(g) 「寄留者」と訳したゲールは、クムラン文書では「改宗者」を意味することがある。(h) 原語の *nyksak* は、ノアに対する表現と同じ(創世九・二〇)。

この勧告の読み手は、生活形態から見ると、ここでは明らかに農民である。語り手は黙示的終末論の地平で語っているが、このような時に関する教えは、農民の実生活における時節の認識に関する教えと結合している。次に示す資料(二)の場合も、農民が勧告の対象となっている。

資料(二) 教訓四(4Q418) 断片一〇三第二欄二行目以下

農民、すべての「……」まで「……………」あなたの籠^(a)の中に入れること、そしてあなたの倉^(b)の中に「……………」時^(c)と、彼らの探求の時とを比較する「……」^(e)。また「……」を同等に扱うな。「……」そして「……」ない。「……」まことに彼らはみな、彼らの時にしたがって求める。そして各人は「その」欲求に応じて、「……………」そして彼は、「……」の途を見つけた。資産^(f)を含む生ける水の源のように、「……」。あなたの商いを「隣人の」ものとを混ぜ合わせるな。驟馬のような禁忌異種^(h)にならないように。また、あなたは羊毛と亜麻との「混紡の」着物のようにならないように)。またあなたの労働が、雄牛と驢馬とをいっしょに犁耕させる者のように(ならないように)⁽ⁱ⁾。さらに、あなたの収穫物が「あなたにとって」禁忌異種を(混ぜ合わせて)播種^(j)したものの「のように」なら(ない)ように。なぜなら、種と豊かな収穫と「葡萄園の」産物とが「いっしょに」聖なるものとされてしまうからである。「そして」らに、あなたの富もあなたの身体も「……」あなたの生命「もみな」とともに消えうせるであろう。そしてあなたの生きている間あなたは「……」を「見出さないのであろう。

註(a)「籠」を意味するテネの聖書での用例は四回のみ(申命二六・二など)。(b)「倉」を意味するקִנְיָהּは、聖書には二回しか用例がない(申命二八・八、箴三・一〇)。(c)「季節」「時節」の意味か。(d)「彼らが探求する」の意味か、「彼らを探求する」ないし「それらを探求する」の意味か不明。(e)次の文と同様の禁止命令なのかもしれない。(f)「資産」と訳した語קִנְיָהּは聖書に用例がなく、語義について論争されている。「倉」や「秘密」とする意見もある。(g)エレミヤ二・一三、一七・一三参照。(h)「禁忌異種」の原語קִנְיָהּは、聖書にはレビ一九・一九と申命二二・九にしか用例がないが、ミシュナでは重要な術語。三好迪訳「キルアーム』『ミシュナI

ゼライーム』教文館、一〇二頁以下参照。(i) 申命三二・一〇以下参照。(j) 「豊かな収穫」と訳した *מַעֲשֵׂה מַעֲרֵב* は、聖書には出エジプト二二・二八と民数一八・二七にしか用例がない。(k) ここで言う「聖なるもの」とは、一般の食用には適さないものの意味。

ここでは、禁忌異種に関する規定が著しく拡大解釈されている点が興味深い。以上のように勧告の読み手としてはまず農民——それも貧農——が想定されるが、職人もいることが「教訓四」断片八一から分かる。「教訓」において注目すべきなのは、勧告の受け手が箴言のような「未熟な」若者ではなく、「分別ある者」(יָדוּעִים) と呼ばれていることである。彼はエッセネ派の一員なのであろうか。関連箇所は以下のようになっている。

「しかし、あなたは分別ある者。もしも、彼が職人としての技能をあなたに与えたならば、そして「……」の知識「……」(教訓四、断片八一、一五行目)。「あなたは、分「別」ある者「……」を注視せよ。「そして」畏れる者たちの神の驚くべき秘義を洞察しなさい。」「……」の始め。「……」そして、起こるべきことの秘義を注視せよ」(教訓三、断片第一欄冒頭部)。

「教訓」においては、読み手が繰り返し「お前は貧しい」と言われており、貧困がしばしば話題になる。この場合の「貧しい」とはいったいどのような意味なのか、貧しさは単なる比喩なのであって、経済的な意味ではないのだろうか。実際に経済的な意味での貧困が問題になっているのだとしても、それはどの程度のことなのだろうか。また経済的な意味での富と貧困が果たしてこの文書全体の重要なテーマなのであろうか。以上のような疑問に答えるために、三点の資料を以下に翻訳する。これらの写本断片は、欠損部や判読困難な文字が多いために研究の初期段階においては、

解釈がきわめて困難であつた。しかし現在では、重複並行する断片を相互に照合することによつて本文が相当程度復元可能となり、その意味内容が明らかになつてきた。いずれもかなりの長文になるが、註とともに掲げる。³⁰⁾

資料(三) 教訓二(4Q416)断片二第二欄(並行箇所)、教訓三断片二第二欄、教訓四断片八、教訓五断片一九) 一—二
一行目

彼の慈しみを開示した。「……」彼の資産のあらゆる欠乏を満「たすために」、また命あるすべてのものに糧を与えるため。そして「……」はない。だがもし彼がその手を閉じるならば、すべての肉あるものの霊は集められる。あなたは「……」するな。「……」それによつて躓かせる。そして彼の侮辱によつてあなたの顔を隠すことになる。彼の愚行によつて囚人から、いくらの金を利息として債主が彼に要求しようと、「……急いで」完済しなさい。そうすればあなたは彼と同等になる。^{d)}もしも、あなたの財産が収められた金袋を、あなたの隣人のために、あなたが(信用して)債主に託したならば、それでもつてあなたの全生命を与えたのだ。急いで彼に属する分を与えよ、そしてあなたの金袋を取り返せ。そしてあなたのことはにおいては、あなたの氣力を減らすな。あなたの聖なる霊を全財産と取り替へるな。まことに「それと」等しい代価はないのだから。「……」[もしも]或る人が好意をよせてあなたの方に傾かないのならば、彼の顔色をうかがいなさい。彼のことに応じて語りなさい。そうすればあなたの望むようになるだろう。^{e)}「あなたの……」彼につらく当たるな。あなたに対する掟を捨てるな。そしてあなたの秘密によつてあなた「自身」が守られるのです。もしも彼への奉仕を彼が課すならば、あなたの魂に休息を与えるな、あなたの目にまどろみを与えるな、彼の命令をあなたがやりとげるまでは。「……だが、」それ以上のことはするな、もしも可能ならば、慎「まし

くしなさい。……」貢納金でさえ、彼には残すな「……」「彼が私を輕蔑した、そして「……」が落ちた」と、彼が言うことのないように。「……」あなたの目を挙げて、そして見よ、ひとの妬みがいかに大きいかを。何ものにもまさつて(ひとの)心の頑固なことを。「……」もしも彼の好意をえて、彼への奉仕にあなたが励むなら、また彼の資産の知恵「……」あなたは彼に助言しなさい。そうすればあなたは彼にとって長子となるであろう。人が彼の一人子に對するよ
うに、彼はあなたに對して憐れみ深い。「……」まことに、あなたは彼の僕であつて、彼に「選ば」れた者なのだ。だがあなたは信用するな、あなたが憎まれないように。あなたの税を取り立てる者のために見張りをするな。彼に對しては賢明な僕のようになさい。さらにまた、あなたと同等ではない者に對して卑屈な態度を取るな。そうすればあなたは彼に對して父となるであろう。「……」あなたの力の及ばない者には、接觸するな。(それは)あなたが躓いて、あなたの恥があまりにも大きくならないためだ。あなたの身を金錢で売るな。あなたが靈における僕となり、あなたを抑圧する者たちに無報酬で奉仕するのは良い。しかし、代価をもつてあなたの名譽を売るな。あなたの嗣業で彼を保証するな、(それは)あなたの身体を売り払つてしまわないためだ。パンで満腹するな。(余白)衣服がないのに、葡萄酒を飲むな。食物がないのに、快樂を求めめるな。そしてあなたが(余白)パンにも欠乏していて、あなたが貧乏であるときに、あなたの貧しさのことでうぬぼれてはならない。(それは)(余白)あなたの命を輕視することのないためだ。またさらに、あなたの懷の器を輕んじるな。

註(a)別訳「倉」。資料(二)の註(f)参照。(b)ここでの「彼」は神。「集められる」は、死んで冥府に下るの意味。(c)「囚人から」と訳した語「*from the prisoner*」の解釈は確かではない。(d)負債を急いで返済せよとの勧告は、教訓三断片第二欄にも出る。シラ二九・二後半—三参照。(e)直訳「あなたの隠されたものの袋」。「隠されたもの」は、

「財宝」を意味する。(f) 隣人の保証人になった時の危険性については、箴六・一一五、シラ二九・一四以下参照。不適切な金の貸し方や保証の仕方については、シラ八・一二以下を参照。(g) 「好意をよせて」ないし「好意をもって」は、後ろの文節「彼の顔色をうかがいなさい」に属するのもかもしれない。(h) 「望み」と解釈した語へフェツ「^ו」の意味は、死海文書では多義的。別訳「あなたの仕事はうまくいく」。(i) 「秘密」の原語ラズは普通、神の秘義の意味で用いられる。しかしここではおそらく世俗的な意味で用いている。シラ八・一七以下参照。(j) 箴六・四、詩一三二・四参照。(k) コヘレト四・四参照。(l) エレミヤ一七・九前半からの引用。(m) 「彼の資産の知恵」とは、仕えている主人の資産の管理のことを意味するのかもしれない。文脈からすると「資産の管理をあなたに託すことになる」と述べているようである。(n) 解釈困難な箇所。(o) 原語マドヘバー^וは、イザヤ一四・四で「虐げる者」と訳される語と同義的に使われている語義不詳の語。「虐げる者」は直訳すると「駆り立てる者」つまり税を取り立てる者と解釈することができる。死海文書では七回用例がある。感謝の詩篇第一一欄では「破滅」と関連している。(p) 「彼」は「税を取り立てる者」をさす。(q) 直訳「あなたの力ではない者」。女性のことをさすのか。(r) 「打つな」とも解釈可能。女性、特に妻に暴力を振るうな、と言っているのかもしれない。(s) 別訳「あなたの魂を」。ここでは負債を返すために自分の体を奴隷にして売ってしまうことをさすと解釈。(t) 「霊における」と読んだ箇所(^ו)は、「逃げて行く」とも読める。そうすると「逃亡奴隷」の意味になる。しかし、ここは実際の奴隷ではなくて、「心の貧しい者」(マタイ五・三)のような比喩的な意味で言っているのだろう。(u) 「名譽」の原語カーボードは、「自分自身」の意味か、あるいは嗣業としての土地のような富の意味か。おそらく「奴隷として身を売るな」の意味。(v) ここでは「パン」ではなしに「食べるもの」という表現になっている。(w) 箴一九・一〇、ミカ二・九、シラ一一・

二七参照。(x) 清貧が一つの徳と考えられると、高慢な態度が生じることになりかねない。(y) おそらく「妻」のこと。Iテサロニケ四・四で「妻」を「自分の道具」ないし「自分の器」と表現していることに注意。「あなたの懐の」に関しては、申命一三・七、二八・五六参照。

資料(四) 教訓二 (MATTH) 断片二第三欄(並行箇所、教訓四断片九、一〇) 一一二一行目

「……」あなたの「……」。あなたは貧しい(貧)ことを覚えよ。「……」そしてあなたに欠乏しているものを、あなたは見つけてはならない。そしてあなたの不実によって、あなたは「……」あなたに対して供託がなされたら、あなたの手をそれへと伸ばすな、さもないとあなたは焦がされて、彼の火であなたの身体が焼かれるだろう。あなたがそれを受け「取ったま」まに、それを返却しなさい。そしてあなたは喜び(余白)なさい、もしもそれからあなたが免除されているなら。またさらに、あなたの知らない誰からも金を受け取ってはならない。さもないと、あなたの貧困は増すであろう。しかしもし彼がそれを死ぬまであなたの頭に置くのならば、それに責任を持ちなさい。だが、あなたの霊はそれによって滅ぼされるな。そうすれば、あなたは真実とともに伏すであろう。そしてあなたが死ぬときにはあなたの記憶が永遠に花咲くであろう。そしてあなたの最期に喜びを受け継ぐであろう。(余白)あなたは、貧しい者だ(余白)。あなたの嗣業以外には、欲しがるな。それによって混乱するな、あなたの境界線をずらすことのないように。また、彼があなたを栄光へと回復するならば、その中を歩みなさい。そして、起こるべきことの秘義によって、彼の誕生を探求しなさい。そうすれば、彼の嗣業をあなたは知るであろう。義のうちに歩みなさい。まことに、神はあなたのすべての道において、彼の姿を輝かせてくださる。あなたを栄化する方に栄誉を帰しなさい。彼の名を絶え

ずほめたたえよ。まことに、貧困から彼はあなたの頭を挙げてくださる。そして貴い者たちとともに、彼はあなたを座せしめる。そしてあなたに栄光ある嗣業を治めさせるであろう。絶えず彼の好意を求めよ。(余白)あなたは貧しい者だ。「私は乏しい、それで私は知識を探求できない」と言うな。あなたの双肩にあらゆる教訓を運ばせよ。そして、あらゆる「知識を」もって、またあなたの思いはかりの大きいなる英知をもって、あなたの心を浄化しなさい。起こるべきことの秘義を探求し、あらゆる真実の道について思索しなさい。そしてあらゆる不義の根源を注視しなさい。そうすれば、あなたは知るであろう、何がひとに苦いかを、ますら男には何が甘いかを。あなたの乏しさの中であなたの父を重んじなさい。あなたの母をあなたの歩みの中で(重んじなさい)。まことに、ひとにとって彼の父は、まさに神のようなものだ。そしてますら男にとって、彼の母はまさに主のようなものだ。まことに彼らはあなたを孕んだるつぼなのだ。そして彼は、彼らにあなたを支配させることとし、霊によつて(あなたを)形造つたのだから、彼らに仕えなさい。そして、起こるべきことの秘義によつてあなたの耳を彼が開くときに、あなた自身の栄光のために、彼らを重ねなさい。彼らの面前で、あなたの命とあなたの長寿のために、榮譽を「……」。(余白)もしもあなたが乏しいのなら「……」掟なしに。(余白)あなたが貧困のうちに妻を娶つたならば、「彼女の」子孫を受け入れよ。「……」起こるべきことの秘義から、あなたが共に結び合ったときには、あなたの肉親である助け手とともに歩みなさい。「……」

註 (a) ひとまず「足るを知れ」の意味にとつて訳したが、前後の文脈が不明なために、ここだけから文意をとるのは困難である。(b)「供託」と訳した語は、動詞 ^(v) のカル分詞、あるいはプアル完了。文脈から「供託」ないし「預金」の意味と推定される。(c) 箴六・二八、イザヤ四三・二参照。(d)「彼」は、人ではなくて、「供託されたも

の」の意味かもしれない。(e) おそらく「負債から」の意味。(f) 意味不明の表現。「頭」と訳した語⁵は、「貧困」の意味かもしれない(死海文書では、しばしば両者が同じように綴られる)。また動詞にとつて「置く」と訳した語は、「彼の名」かもしれない。「頭」であるとすると、エゼキエル一・二一、一六・四三を参照して「責任」つまりここでは「裁量」の意味にとることもできる。別訳「しかもし彼がそれをあなたの自由裁量のもとに置くならば」。(g) 「……とともに伏す(＝寝る)」は、性的な表現をわざと比喩的に用いたのか。単に「信仰を抱いて死ぬ」の意味か。(h) シラ四九・一〇参照。「記憶」は「名声」の意味。(i) 「最期」原語⁶。別訳「将来」「結末」(詩三七・三七以下、エレミヤ三一・一七、箴二四・一四など)。ここでは「死ぬとき」と並行して用いられているが、この文全体は、おそらく死後の希望とも関係する。(j) 「地境をずらすな」との勧告は、箴二二・二八、二三・一〇でなされているが、ここでは比喩的に用いられ、「法を犯すな」の意味。(k) 「誕生」(נָסַח)は、おそらく占星術用語。人が誕生したときの占星術的な徴が問題。ホロスコープ(4Q186)で論じられている。(l) 詩三・四、一一〇・七参照。(m) 天使のこと。(n) 「好意」原語ラツォーン(רָצוֹן)。別訳「意思」。(o) 「……と言うな」は、知恵文学で頻繁に用いられる表現(箴三・二八、二〇・二二、シラ五・一、三以下等)。(p) 「知恵の根源」秘義4Q306断片1a第二欄―断片1b、「英知の根源」教訓四断片五五、秘義4Q301断片1参照。(q) モーセの十戒(出二〇・二二)を意識した表現。(r) 「歩み」⁷と「貧困」⁸は、綴りが類似している。「貧困」の誤記か。(s) 教訓二の写本では「父」⁹、教訓四断片九では「神」¹⁰となっている。「神」を正文とした。(t) 「主」は複数形。これは「神」エローヒームが文法上複数形になっているのに倣った表現で、人間の「主人」とは区別している。(u) 「るつば」は「胎」のこと。(v) 「神」のこと。(w) 別訳「秘義へと」。(x) 「彼」は「神」のこと。「耳を開く」は、「告げる」の意味で聖書でよく用

いられる表現。サムエル上九・一五、サムエル下七・二七、ヨブ三三・一六等参照。(y) 創世二・一八以下を意識した表現。

資料(五) 教訓三(4Q417) 断片二第一欄(並行箇所、教訓二断片二第一欄、教訓四断片七a+b、教訓五断片二二) 九一—二七行目

そして、あなただけのために、あなたの貧困の中であなたの「喉を」広く開けるな。「……」まことに、貧乏人よりも卑小な者がいようか。あなたに喪中には喜ぶな、あなたが生きている間に労苦することのないように。起こるべき秘義を注視せよ。そして、救いの誕生(の時)を捉えよ。誰が栄光と労苦とを受け継ぐのかを知れ。「……」ではないか。そして、彼らの喪に対しては永遠の喜び。あなたの仕事のために係争の主人となりなさい。そして「……」は、ない、あなたのあらゆる墮落^(e)に対して。義しい支配者のようにあなたの判決を語りなさい。「……」をとるな。あなたの過失を見過ごすな。あなたが判決で争う時には、謙遜な人のようになりなさい。「……」をとれ。そうすれば、神は見て、その怒りを転じてくださる。そしてあなたの罪を許してくださる。「まこ」に、彼の怒りの前では、誰も立つことはできない。彼の裁きにおいて、誰が義とされるだろうか。そして赦しが必要ならば、どのようにして貧者が「彼の前に立ちえようか」。そしてあなたが、もしもあなたの必要な食料に欠乏しているならば、あなたの余剩(物資)を「いっしょに……」持って行きなさい、「もし」も余りがあるなら、彼の気に入る町に運びなさい。そしてそこからあなたの分け前を取りなさい。そしてそれで「上は」加えるな。「余白」してもしも、あなたが欠乏していても、あなたの不足は富がないということではない。なぜならば、(神の)財宝は不足することがないからだ。「……」彼の口(に

よって) 万物が生じるのだ。彼があなたの糧とするものを食べなさい。そしてそれ以上は加えるな、「あなたが」(余白) あなたの命を「……短くすることのないように。(余白) もしも、あなたが欠乏しているために他人の金を借りるならば、昼も夜も「休んでは」ならない。そしてあなたの魂には休息がない、あなたに貸した者に負債をあなたが返してしまふまでは。彼にうそをつくな。どうしてあなたが咎を負つてよかろう。また、「あなたに貸した者の罵りによつて「……」もはや彼の隣人に対するあなたの信用はないであろう。そしてあなたが欠乏するときに、彼の手を閉じるだろ^(m)う。あなたの力「……」そして彼のように借りなさい。そして債主を知りなさい。そしてもしも、彼があなたを鞭打ちにするならば、「……」[あなたを打つ]者から隠れるな。あなたの恥「辱」があらわたなることのないように。「……」彼を支配する者。そうすれば彼は杖で彼を打たないであろう。

註(a)「喉を広く開ける」は、ハバクク二・五、イザヤ五・一四に見られる慣用的表現。葡萄酒をがぶ飲みするよ⁽ⁿ⁾うな行為を言うのであろう。(b)「救いの誕生」は、おそらく占星術用語。「捉えよ」は、「把握せよ」の意味。(c)「栄光を(嗣業として)受け継ぐ」という表現は、死海文書によく出る(教訓二断片二第三欄一一行目「栄光ある嗣業」。感謝の詩篇第四欄二七行目等)。この表現は箴三・三五にも見られるが、死海文書では終末論的な意味で用いられ、栄光ある永遠の生命を得ることを言う。(d)「仕事」の原語 ^(o) へフェツ。別訳「利益」。註(h)を参照。(e)別訳「歪曲」。「心がひねくれている」ような場合に用いる語(箴二・八参照)。(f) ^(p) は、元来「餌」の意味であるが聖書には「食料」を意味する用例もある(箴三一・一五、詩一一・五参照)。(g) おそらく余剩農産物を市場に持つていって売れと言っている。(h)「町」と訳した語 ^(q) マホーズは聖書では詩一〇七・三〇にしか用例がない。ここは船に関連する箇所なので普通「彼らの喜ぶ港へ」などと訳される。「喜び」「お気に入り」とも訳されるへフェツは、

死海文書では「仕事」「取引」「利益」の意味にもなる。別訳「彼の取引の場所へ」。(i)「分け前」*נַחַל* ナハラは普通「嗣業」と訳されるが、ここでは市場で得た「売り上げ金」のことであろう。(j) 神の摂理に信頼せよとの勧告。(k) 資料(三)の註(j) 参照。(l) シラ二九・五参照。(m) 申命一五・七参照。(n) 動詞「集める」*סָמַח*からの派生した商業用語らしい。別訳「利得」「報酬」。(o) 意識。ここには「打撃」を意味する表現があるだけ。

まず資料(三)において、勧告の対象となっている者が日常の衣食にも事欠くような経済的に貧しい者であることは明らかである。このことは資料(四)において「あなたは貧しい」と繰り返されていることによっても確認される。資料(三)で金銭の貸借に関して細々とした指示が連続することは、このテキストの背景となっている社会が貨幣経済の発達した社会であることを物語っている。そこでは富裕層と貧困層への二極的な階層分化が進行しているようである。この点では、シラ書が置かれていた社会状況と共通している。但し、シラ書では読者が教養のある富裕な社会層に属していたのに対して、「教訓」の読者は、労働者であり、しかも貧困に直面している点が異なっている。このような弱い立場におかれた者が負債を抱えた時の危険は明白であるから、資料(五)の後半では、借金はできるだけ早く——それも必死で働いて——返済せよと勧告される。資料(三)では隣人の保証人になった時の危険についても語られるが、箴言のように絶対に他人の保証人になるなどは勧告されていない。こうした場合の債主との付き合い方について語る部分は、意味深長で興味深い。テキストが破損しているために細かいところは分からない。いずれにせよ、相手とはどこまでも冷静に賢く付き合えと勧告しているところは、知恵的な伝統につながる。

資料(四)は、貧しい者が供託金を受け取った場合の心構えについて語っているが、このような実地的な勧告が「起

こるべきことの秘義」と関連させて終末論的希望の中で語られる点が、「教訓」の著しい特徴である。このような希望の中に生きる者は、どのような貧困状態にあつても、卑屈になることはなく、人間としての尊厳を失うことはない。資料(五)で、「あなたの余剰」について語っている部分は、意味が判然としないが、おそらく農民である読者が農産物を近くの市場に持つて行つて売り、小銭を稼ぐように勧められているのであろう。貧しいことは、それ自体が悪いことなのではない。貧乏であつても英知の探求者は、神に選ばれた者である。だからと言つて、貧乏な暮らしをすることが、一つの美德であるかのように錯覚してはならない。資料(三)末尾の「あなたの貧しさのことでうぬぼれてはならない」とのことは、そのような意味であろう。彼には妻があるのであつて、家族を養う義務があるのである。妻子を大切にし、父と母を敬えと勧告されるのである(資料(四))。

以上のような「教訓」の内容は、閉鎖的な経済生活を営む「修道院的な」クムラン共同体のイメージとは合致しない。これがエッセネ派文書であるのなら、その歴史的な位置づけが問題になる。この「教訓」の受け手に關しては、或る程度推定できるとしても、誰がこのような勧告を語っているのかは、文書から直接的には明らかにならない。語り手は教団の指導的な立場にいる教師的な存在であり、受け手はいわば平信徒である教団の構成員なのであろうか。このように詳細な歴史的脈絡は不明であるとしても、その基本的な思想傾向はかなり明らかになった。「教訓」の富と貧困に関する教えは、基本的には古代イスラエルの伝統的な価値観を継承している。しかし、それが黙示的終末論と分かちがたく結びついているところが特徴的である。貧困はそれ自身ではどこまでも否定的価値ではない。しかし「教訓」の語り手は、貧困の中で生活する「知恵の探求者」に対して、創造主に信頼して人間としての尊厳を守りながら賢明に生きるようにと勧めるのである。

註

* 参照した文献は数大なもののため、以下には要約の書籍情報と提示するにとりかね。

- (一) この文書と関する議論については Daniel J. Harrington, *Wisdom Texts from Qumran*, London (1996) 40-59. を参照。最近のことは Armin Lange, *Wisdom Literature and Thought in the Dead Sea Scrolls*, in: *The Oxford Handbook of the Dead Sea Scrolls* (2010) 461-465.
- (二) なお、この死海文書の重要な写本を認識した著者として Michel Wise, Martin Abegg, & Edward Cook, *The Dead Sea Scrolls, A New Translation*, Harper San Francisco (1996) 378-390, 425' 4Q410, 4Q412-413, 4Q415-421, 4Q423, 1Q26 等を「The Secret of the Way Things Are」に紹介している。
- (三) J. Strugnell, D. J. Harrington and T. Elgvin, in consultation with J. A. Fitzmyer, *Qumran Cave 4, XXIV: 4QInstruction (Musar leMevay)*, 4Q415 ff., DJD XXXIV; Oxford: Clarendon (1999) を読む。当時の世界書には文書 425' 4QInstruction 等一巻あるとしている。本巻の 425' 4Q415 = 4QInstruction を「禁籠」の 425' の表記とする。その他 Musar leMevay を使用した。
- (四) 八名の筆記者による八種類の写本の相互関係は DJD XXXIX; Oxford: Clarendon (2002) 308-309 を参照する。

を以下とする。

- (5) Armin Lange, *ibid.*, 463 頁、前二冊以来の二冊記述の 425' の名前を「ナヘン」の書と見做し、同時代の知識人等が用いたものとする。
- (6) この文書の言語は、死海文書全体の中心となる難解なもので属する。古語彙と関係する語を、特殊な語が用いられている上は、死海文書の特色の比喩的な表現なども含む。『聖書研究』の縁語 (シ・ヒ・ハ) の語彙については、勝村弘司「死海文書の隠語をめぐって——聖書とヘブライ語の隠語をめぐって——」『田代耕太郎』巻 5 号、二〇〇七年、四一―四二頁を参照する。
- (7) Torleif Elgvin, *The Mystery to Come: Early Essene Theology of Revelation*, in: F. H. Cryer and T. L. Thompson (ed.), *Qumran between the Old and New Testaments*; JSOT Sup 290, Sheffield (1998) 113-50; idem, *Priestly Sages? The Milieus of Origin of 4QMysteries and 4QInstruction*, in: *Sapiential Perspectives: Wisdom Literature in the Light of the Dead Sea Scrolls*, STDJ 51, Leiden (2004) 67-87; John J. Collins, *The Mystery of God. Creation and Eschatology in 4Q Instruction and the Wisdom of Solomon*, in: F. Garcia Martinez (ed.), *Wisdom and Apocalyptic*, Leuven (2003) 287-306; Armin Lange を参照する。Elgvin は「禁籠」に 117 の

承層を認める。まずシラ書に近い知恵的勧告の部分がより古い伝承層にあり、これを黙示思想を特徴とするケムラン共同体に近い書記(あるいはレヒ人祭司)が編集加工したのだと言う。新しい方の層についてはニエル書のヘブライ語部分と「教訓四(4Q418)」断片八一などとの用語的類似に注目してゐる。しかし、本論考で詳しく検討する資料を見れば分かるように、実践的知恵的な勧告と黙示的な世界観は、相互に絡み合っており、両者を分離することはできない。

- (8) Catherine M. Murphy, *Wealth in the Dead Sea Scrolls and in the Qumran Community*, STDJ 40, Brill (2002) 163-209; Matthew J. Goff, *The Worldly and Heavenly Wisdom of 4QInstruction*, STDJ 50, Brill (2003) 127-167; idem, *Discerning Trajectories: 4QInstruction and the Sapiential Background of the Sayings Source Q*, JBL 124-4 (2005) 657-673.
- (9) G・ファン・ラート著、勝村弘也訳「イスラエルの知恵」日本基督教団出版局、一九八八年、二七頁。勝村弘也「箴言 解説」ヨブ記 箴言「岩波書店、二〇〇四年、三六九―三七四頁。
- (10) 勝村弘也「箴言における釈義上の問題(2)」『キリスト教論叢』第三三三号、二〇〇二年、一九頁以下。同著「旧約釈義、箴言五 勤勉と怠慢」『聖書と教会』一九九二年二月号、日本キリスト教団出版局、三二頁以下。同著「旧約釈義、箴言六 経済生活の諸相」『聖書と教会』一九九二年三月号、二八頁以下。
- (11) ファン・ラート、前掲書、二二三頁以下の「善」に関する考察を参照。「祝福」に関して、Claus Westermann, *Theologie des Alten Testaments in Grundzügen*, ATD Ergänzungreihe 6, Göttingen (1978) 88ff.を参照。但し、この書では箴言にはほとんど言及がない。
- (12) アモス八・四一六、ホセア二・八、ミカ六・一〇―一二等。
- (13) ファン・ラート、前掲書、一三五頁。勝村「旧約釈義 箴言六」三二頁。
- (14) 「傲慢」「自慢」「性急さ」については、ファン・ラート、前掲書、一三五頁以下を参照。ここでは、エジプトの教訓文学からの影響に言及されている。イザヤは繰り返し「傲慢」「傲慢」について語っている(二・一二以下、一三・一一、一六・六、二三・九等)。
- (15) 勝村弘也「応報か、行為・帰趨連関か?」『基督教学研究』第十八号、京都大学基督教学会、一九九八年、一一二七頁等。
- (16) 勝村弘也「旧約釈義、箴言七 けちんぼうの飽食」『聖書と教会』一九九二年四月号、三三頁以下参照。
- (17) このような格言にはエジプトの教訓文学からの影響が考

えられることについては、勝村弘也「箴言における釈義上の問題(2)」(註10)二八頁参照。

(18) H・G・キッペンベルク著、奥泉康弘、紺野馨訳『古代ユダヤ社会史』教文館、一九八六年、八三―一七頁参照。

(19) 勝村弘也「古代の賢者たちが見た〈寓〉の問題」『アレテイア』第二〇号、日本キリスト教団出版局、一九九八年、四頁以下参照。

(20) 六・三二、七・七、九・一六参照。レープは「心臓」を意味する。旧約では心臓はしばしば知的活動の中心と考えられた。しかしハサル・レープは単に知力が不足していることを意味するのではなく、軽率な行動(六・三二、一七・一八等)や怠慢(二四・三〇)もハサル・レープである。

(21) 4Q525については、勝村弘也「死海文書の翻訳……」(註6)三七頁以下参照。

(22) 勝村弘也「旧約釈義、箴言九 働く女性」『聖書と教会』一九九二年六月号、三二頁以下参照。

(23) 勝村弘也「コーヘレト書 解説」『ルツ記 雅歌 コーヘレト書 哀歌 エステル記』岩波書店、一九九八年、二二頁。

(24) 引用は月本昭男訳による。前掲書(註23)、六一頁以下。

(25) 小友聡「コーヘレト書の「反黙示思想」」『旧約学研究』第八号、二〇一一年、四一―五七頁。なお、古代イスラエル人の時間表象について論じるに際して、円環的な時間と直線的な

時間を図式的に対立させるような試みが無意味であることをフォン・ラートは鋭く指摘している。荒井章三訳『旧約聖書神学 II』日本基督教団出版局、一九八二年、一三九頁以下を見よ。時間表象に関して言うと、コーヘレトが古代イスラエルの伝統的な考え方から遠く離れているわけではない。

(26) シラ書一九章については、Goff, *The Worldly and Heavenly Wisdom* (註8) P.139 参照。隣人に対する経済的援助については、マタイ五・四二と比較せよ。なおシラ書の読者は一定の資産をもつ教養層であるが、「教訓」の読者は貧困層である。

(27) 4Q423 断片三と四は、それぞれ4Q26 断片二と一と重複し、4Q423 断片八は4Q418 断片八一と重複するといった具合である。4Q423 は「教訓」の後半部分にあつて、比較的保存状態のよい4Q416-417の主要な断片は前半部分にあつたと考えられ、両者の重複がない理由が説明される。

(28) James M. Scott, Korah and Qumran, in: *The Bible at Qumran. Text, Shape, and Interpretation*, Peter W. Flint (ed.), Eerdmans (2001) 182-202. 417 の断片に関する研究である。ここでは民数記一六章以下が問題になっているが、一般的に言って死海文書のセクツ的と判断される文書では民数記はきわめて重要なテクストである。この論文では、ダマスコ文書、共同体の規則などとの比較が行われている。

なお、以下に掲げる資料では、「……」は、写本の欠損部分を示す。また「」中の語は、推読によって補ったことを示す。資料に関する註は、本論考の末尾の註とは別に、訳文の直後に載せる。これらは小文字のアルファベットで示した。

(29) 「起こるべきことの秘義」と豊かな収穫との関係については、*4Q423*断片三でも語られている。

(30) テクストの復元については、*DJD XXXIV* (＝註3) に従っている。

(31) *4Q418*断片六九第二欄では、真の英知を探求する選ばれた者たちは、天使のように永遠の生命を得ると主張している。ここで「義人の復活」について語られているのかどうかについては、論争が続いている。なお「教訓」では秘義を「注視する」「探求する」「つかみ取る」「思い巡らす」ことが勧められる。Matthew J. Goff, *Discerning Trajectories* (＝註8) 665.

(32) 伝統的な教訓文学では、古代エジプトにおいてもイスラエルにおいても教訓の語り手が誰であるかが作品中で語られる。「宰相プタハヘテブ」「アメンエムオペト」「ソロモン」「コヘント」「父祖イエスス」(シラ書序言)といった具合である。しかし、クムランの知恵文書では、「教訓」に限らずどの文書の場合でも語り手の固有名詞は出現しない。